

(1) 1994年6月20日

燎 原

第94号



美山・内久保の山里

品角小文

農民運動散歩記(十・完)

品角一郎
(遺稿)

この「農民運動散歩記」は、故品角一郎氏(一九一一～一九八一年)が、その最晩年に死に至るまで書きつづけられていたものである。

すぐれた画家であり、民主的な詩人でもあった品角氏は、一九四六年から約十年間農民運動に携わっていたことがある。日本農民組合京都府連合会の泉隆書記長のもとで、書記として京都府連の再建と発展のために活躍されたのである。この記録はその当時の思い出を書きつづられたものである。

品角氏がこの「散歩記」を書かれるようになったのは、一九七八年の夏に、当時私どもがやっていた京都府の農地改革史に関する研究会で、品角氏に敗戦直後の農民運動についての思い出を語って貰ったことがきっかけ

になっている(この研究会の成果は、京都府農地改革史編纂委員会編『京都府農地改革史』一九八〇年刊、にまとめられている)。本文にも書かれているような事情から、日農京都府連に関する資料が焼失してしまっていいたために、関係者から当時の農民運動の状況についても聴き取りを行うことになったのである。

この中では、品角氏が農民運動にかかるようになった事情や、丹後を中心とし府下全域に及ぶ農民運動の状況が、数多くのエピソードを交えながらビビッドに描かれている。

体験的農民運動史として、農地改革期(一九四五～五〇年)の農民運動を知る上で、貴重な資料となりうるであろう。

(立命館大学教授 大庭輝雄)
(九二・九・二〇稿—再録)

は、宮津町内にはびこる暴力団とは、宮津町議員がぐるになって、不正をはたらき、町政に影響をあたえていた。これに対して宮津町の警察はこれを知っておりながら放任し、無関心をきめこんでいた。これに対して、宮津の文化人、一部の労働組合、社会党、共産党、さらには労農党などが共闘組織をつくり、会議をひらき町民大会を開催して、町長、公安委員の辞任と、町会解散の要求を決議したのである。だが町長らは、当時の木村知事らの激励で、いったん辞職すると公言しておきながら居すわり、結局暴力団とのつながりがあった町議五名が辞職しただけでこの事件は終り、その後の、補欠選挙に党から前田保三郎氏が立候補したが、僅少差で残念ながら落選したのである。

私もこの宮津事件のとき、丹後地区の長壁氏からの連絡で、町民大会のときに党から派遣されて演説にいったことがあ

宮津町事件

さらに、一九四八年(昭二三)から一九四九年(昭二四)にかけてあの宮津町事件がおきた。それは、宮津町内にはびこる暴力団と町会議員がぐるになって、不正をはたらき、町政に影響をあたえていた。これに対して宮津町の警察はこれを知っておりながら放任し、無関心をきめこんでいた。これに対して、宮津の文化人、一部の労働組合、社会党、共産党、さらには労農党などが共闘組織をつくり、会議をひらき町民大会を開催して、町長、公安委員の辞任と、町会解散の要求を決議したのである。だが町長らは、当時の木村知事らの激励で、いったん辞職すると公言しておきながら居すわり、結局暴力団とのつながりがあった町議五名が辞職しただけでこの事件は終り、その後の、補欠選挙に党から前田保三郎氏が立候補したが、僅少差で残念ながら落選したのである。

また、一九四八年八月に、埼玉県本庄において、町会議員が暴力団を背景にして、暴行や脅迫をおこない、「暴力の町」として、朝日新聞が摘発、報道をやり、本庄町の民主化と暴力排除をうつたえた。これに対して、町民はあらゆ

暴力団の横行

戦後、国民生活の混乱の間隙をぬつて、全国的に暴力団の横行は実際に激しいものがあった。片山内閣(一九四七・五～四八・二)は、暴力団の顔役の一掃に手をつけたことがある。

る圧迫や、脅迫をけって、たちあ
がり一万人余りで町民大会を開催
し、公安委員の総辞職、警察署
長、検察当局の罷免等の要求を決
議し、町政民主化の要求をほぼ実
現したのである。

「このように全国的に暴力团が地方自治体を毒牙にかけ、市民を脅迫していたとき、警察権力や、公安部員は、彼等の横行を黙認していた事実は全国的に多くみられたのである。こうした恐るべきことが全国的な現実であったなかで宮津町事件がおきたのである。

これに対して、宮津の文化人、労働者をはじめ良識ある市民と共に産党、社会党、労農党が統一し、団結して町政刷新に起ちあがったことは、実にすぐれた民主主義擁護の闘争であったと評価せねばならない事件であった。

さらに一九五一年（昭和二六）八月宮津では矢野事件が起きた。この事件は、与謝地区の国警の岩井巡査が「講和条約がおわれば、日本共産党員は絞首刑、家族は銃殺」になると暴言をはいた。これを共産党丹後地区委員会は壁新聞

この事件の公判闘争は一九五二年から五三年にかけて宮津の地裁判でやられたが、当時平和運動にとりくんでいた与謝郡青連の活動家を国警がスパイ、干渉、弾圧をしていた事実を、南会長、河嶋副会長らをつぎつぎに証人喚問して暴露して、いかに国警が悪質な方法で共産党をはじめ、各民主団体を犯罪団体としてとりあつかっていたかを大衆の前に明瞭にしたのである。

公判の結果、裁判長は、岩井巡査が暴言をはいた事実はみとめたものの、それは勤務中でなく、夜間酒をのんでひとりごとをいったまでだといいのがれ、また、壁新聞については、事実を粉飾し、眞実を報道していないとして有罪と断定し、罰金五万円を言渡したのである。大阪の二審では、壁新聞の文中の「売国奴」は侮辱罪だとして拘留二〇日の刑を言渡したが、名譽毀損については無罪としたのである。

年から五三年にかけて宮津の地裁でやられたが、当時平和運動にとりくんでいた与謝郡青連の活動家を国警がスパイ、干渉、弾圧をしていた事実を、南会長、河嶋副会長らをつぎつぎに証人喚問して暴露して、いかに国警が悪質な方法で共産党をはじめ、各民主団体を犯罪団体としてとりあつかっていある。

て国家警察の不正を、判したことは有名である。また沢村秀夫氏が印刷していた、「平和をまろぐ会」の機関紙「通信場」で事件の内容は逐一報道され町民の大きな関心をよんだのである。

この事件は、国警の岩井巡査の日本共産党に対する許しがたい暴言から、党員の逮捕に発展した事件であるが、その本質はなにか。國家警察の本質を国民の前に暴露した根の深い陰険な事件であった。それに対して丹後地区委員会が断固たる態度で、権力と闘い、事件の本質を暴露した鬭争は実際に立派であったと思われる。

この事件は、国警の岩井巡査の日本共産党に対する許しがたい暴言から、党員の逮捕に発展した事件であるが、その本質はなにか。国家警察の本質を国民の前に暴露した根の深い陰険な事件であった。それに対して丹後地区委員会が断固たる態度で、権力と闘い、事件の本質を暴露した闘争は実に立派であったと思われる。

夜は、宮津は文化都市であるということで、他の町村では困難であった「レコード・コンサートの夕」をひらくことを、全員の意目で実行することになった。ところが、その当時電蓄をさがしたりレコード（ベートーベンの第九シンフォニー、それからシユーベルトの未完成交響曲）を準備するのが大変なことであった。

四、五軒の知人を尋ねてさがしてみたが、みつけることができなかつた。ところが、ほとほと困っているときに、宮津発電所に勤務している青年労働者が、電蓄もレコードももつていることがわかり、急いでその青年に依頼して借りられることになった。

日本共産党の「音楽の夕」とかかれたポスターが、町角のあちこちにはられていた。夕方になると、工作隊員が一斉にメガホンをもって動員に町へ出た。夕暮れになると古風な建物である宮津公会堂から、雄壮なベートーベンの第九交響曲の音楽が流れていた。

配電のことからすべてを準備してくれたのは電産の青年労働者の一二、三名の人々であった。会場は、定刻には満員のありさまであった。長壁氏が開会のあいさつを

し、私が文化工作隊の任務について話し、それからレコード・コンサートにはいった。最後に河田賢治氏が演説したあとは、宮津の同志と、工作隊員全員が腕をくみ、インナーショナルを聴衆と共に大合唱して終った。

その頃の、文化状況は、戦後の混乱で悪く、非常に貧弱であった事情もあり、宮津でのこの催しは成功した。終ってから地元の同志も参加してもらって総括会議をもつたが、「党の主催した催しもので公会堂にあれだけの人が集まつたのは実にめずらしいことだ」と地元の人々が話していたのは実に印象的であった。

農地委員会選挙

ここで、その当時のこと思い出すと、一九四九年(昭二四)六月京都地方区から参議院選挙に当選した大山郁夫氏が、一九四七年一〇月に十六年ぶりに祖国日本に帰り、一月に日比谷の音楽堂で「大山郁夫歓迎国民大会」が開催されている。また、この年の春、二月には都道府県農地委員会の選挙があり、三月第一次の買収計画が決定し、農地改革がすりだし

取上げ、ヤミ小作、土地のヤミ売が激しくなり、農地改革の違法行為が全国的におき、農民は強い圧迫をうけているのである。その当時日本農民組合に参加していた農民の数は全国で、二五〇万余りで、アメリカでは、ロイヤル陸軍長官は、「日本を全体主義への防壁とする」と演説している。また頃、アメリカでは、ロイヤル陸軍の警官は、集団で突撃訓練を一できていられない弱点があった。また、片山内閣の農相であった平野力三が、内閣の方針に反した行動をとったので、片山首相から罷免される事件が起きた。罷免された平野力三は、日農から分裂主義者として除名され、つづいて一九四八年全国農民組合を組織し、農民戦線の分裂のためにうごいたのである。

その頃、国民のほとんどは、食糧不足でヤミ米でかろうじて生きていたが、山口良忠判事は、法を守る自分は法は破れぬといって、ヤミ生活を拒否し栄養失調のため死亡し、大きな社会問題になつた。

片山内閣と新警察制度

一九四七年一〇月片山内閣は監督黒沢明、今井正、五所平之助

九四八年春、国家地方警察本部、國家公安委員会を設置して新警察制度を発足し、九万四千から十二万五千に警官を増員した。その頃、アメリカでは、ロイヤル陸軍長官は、「日本を全体主義への防壁とする」と演説している。また日本の警官は、集団で突撃訓練を全国でやっていた。

東宝事件

この警官の突撃訓練、人民弾圧の訓練は早速実践された。それは東宝争議であった。戦後、「戦争と平和」「酔いどれ天使」「今ひとたびの」といったすばらしい映画を製作していた東宝映画の製作

者、労働者に四月八日突然大量首切りが発表された。これに対して映画労働者は起きあがり四八年の労働組合運動のなかでももっとも激しい闘争を開いたのである。

日本映画史上、一九四八年は実際に記念すべき年で、このはげしい東宝映画の労働者の闘争はただたんに映画だけのたたかいでなく、日本文化を守る上からも重要な闘争であった。それだけに、優れた監督黒沢明、今井正、五所平之助らがこの闘いに参加、いただけ

でなく、多くのすぐれた俳優も参加していたのである。また、他の文化戦線の人々も、文化を守るためにこの東宝映画の闘争に参加している。このときの争議に出動しなかつたのは、軍艦だけで、装甲車、其他の武装した警察が動員されたのである。結局この一九五日の闘争は、一〇月一九日に解決したが、この争議を出発点として、日本映画史に大きな足跡を残す「独立プロの時代」がおとづれたのである。

たのである。

また、作家の太宰治はこのころ自殺している。この太宰治の死は、芥川龍之介の自殺事件以来のこととで社会的反響をひきおこした。また、一九四八年七月一九日、九州地方を遊説していた、日本共産党的書記長徳田球一氏が佐賀市公会堂で右翼団体菊旗同志会の右翼分子に爆弾で襲撃され負傷した。この事件は私たちに大きな衝撃をあたえたのである。この事件とおなじ頃、イタリア共産党書記長パルミロ・トリアッチも右翼青年にピストルで狙撃された事件がおきている。この二つの事件は白色テロが生きている事実を明らかにしたのである。

政令二〇一号

この年に忘れられぬ大きな事件がおきている。それはつぎのことだ。一九四八年七月二十二日マッカーサーは芦田首相に書簡をおくった。それは国家公務員法を改悪し、公務員のストライキ権、団体交渉権をみとめるなど指示したのである。この書簡は国会の議決をまたずにはじめたのである。それに、地方の人々には大変よろこんで迎えてもらつた原因は、

この「政令二〇一号」の弾圧法に対しても労働者階級は非常事態宣言を発して、全国的にたちあがつたが、芦田内閣は、アメリカ占領軍の指揮のもとに、労働者を「政令二〇一号」違反で検挙、逮捕、投獄し、弾圧をくだしてきたのである。北海道の国鉄労働者が「民族独立柚原青年行動隊」を組織し、職場離脱して、全国で戦闘的に行動したのもこのときであつた。また民主主義擁護同盟が結成されたのもこの頃である。「政令二〇一号」の弾圧は、国鉄、全通の労働者階級に対して攻撃してきたが、その弾圧は、東宝撮影所の仮処分、つづいて闘争中の電産、日立製作所、全石炭の労働者階級において、日本労働者階級は重大な局面に直面させられたのである。

文化運動の発展

一方、文化運動の面では、労働運動の激化とともに、労働者階級の社会的、人間的自覚の前進によって、全国的に職場における文化運動も大きく成長していったのである。各職場では自立劇団が組織され、さらにそれは、全国自立劇

で。

この「政令二〇一号」の弾圧法に対する労働者階級は非常事態宣言を発して、全国的にたちあがつたが、芦田内閣は、アメリカ占領軍の指揮のもとに、労働者を「政令二〇一号」違反で検挙、逮捕、投獄し、弾圧をくだしてきたのである。北海道の国鉄労働者が「民族独立柚原青年行動隊」を組織し、職場離脱して、全国で戦闘的に行動したのもこのときであつた。また民主主義擁護同盟が結成されたのもこの頃である。「政令二〇一号」の弾圧は、国鉄、全通の労働者階級に対して攻撃してきたが、その弾圧は、東宝撮影所の仮処分、つづいて闘争中の電産、日立製作所、全石炭の労働者階級において、日本労働者階級は重大な局面に直面させられたのである。

宮津と私の生い立ち

ところで、宮津は私の生れ故郷であるうえに、肺病の療養生活をしたのである。さらに、労働者階級自身が、わが民族の文化創造の一躍にならう実力を身につけたことを物語るものである。

私たちが京都府下で大胆に実践した、文化工作隊には、各職場、学校でうたごえ運動と、演劇運動に参加していた人々が多く参加して活動していたのである。

私たちが京都府下で大胆に実践した、文化工作隊には、各職場、学校でうたごえ運動と、演劇運動に参加していた人々が多く参加して活動していたのである。

私たちが、幻燈・歌曲等実際に貧弱なものが文化工作活動をおこなつたのに、地方の人々には大変よろこんで迎えてもらつた原因は、

団協議会が結成され（きがでてきたのである。京都においても終戦後ただちに演劇運動がはじめられた。また各職場でも演劇研究会、演劇集団が組織されていつた。現在京都にある劇団も（劇団京芸、人形劇団、人間座等）その頃に組織されていったのである。

このうたごえ運動は急速に職場、地域、学校等に組織され、労働歌、ソヴェット歌曲が労働者、働く仲間に普及されていったのである。この文化面での新しい抬頭は、ブルジョア文化に対する労働者階級のきびしい批判精神から、みずから力での文化創造に発展したのである。さらに、労働者階級自身が、わが民族の文化創造の一躍にならう実力を身につけたことを物語るものである。

以上、少し話がわきみちにそれだが、当時の社会状勢がこんなものであつたために、町でも村でも部落でも、共産党の話に対して大きな関心があつたことは事実である。特に占領軍、政府についての話や、労働者階級の闘争についての話でも、共産党の話に対して大きな関心があつたことは事実である。特に占領軍、政府についての話や、労働者階級の闘争については強い関心があつたのである。

以上の如きがでてきたのであると考へられる。宮津町でのレコード・コンサートが大変な成功をおさめたのも、その頃の文化が荒廃していたためだとと思われる。たが、当時の社会状勢がこんなものであつたために、町でも村でも部落でも、共産党の話に対して大きな関心があつたことは事実である。特に占領軍、政府についての話や、労働者階級の闘争についての話でも、共産党の話に対して大きな関心があつたことは事実である。特に占領軍、政府についての話や、労働者階級の闘争については強い関心があつたのである。

政権の争奪戦をやっていた。宮津からは津原武（民政党）、峯山からは吉村伊助（政友会）、加佐郡の地盤からは村上國吉（政友会）、宮津の町会議員のなかにも、地元の津原派、吉村派、村上派に別れて対立していた。なかなか激しい選挙戦であったことをおぼえている。役場の給仕の私までが選挙の渦中にまきこまれた感じがしていた。なぜなら町会議員同士が暴言のあびせあいをやったり、また暴力ざたがあつたり実際に激しい有様であった。

大杉栄のこと

その頃、私の懶裡にはどうしても消えない一つのことがあった。

それは関東大震災（一九二三年〔大正一二〕九月）の時に甘粕大尉に暗殺された、無政府主義者の大杉栄のことであった。当時大人の話では、大杉栄は国賊で、だから愛國者甘粕大尉が殺したとの話であつたが、私にはどうしても理解できなかつたのである。だから民政党と政友会が政権争奪戦をしていても、給仕の私にはピンと重な選挙であるとは感じられなかつた。だが心の奥では、日本の今

後を動かす大きな選挙だから、町会議員の連中までが目の色を変えたり、叫んだり、喧嘩をして運動したり、やっているのだ。民政党、政友会のどっちが正しいのか、悪いのか、そんな難しいことはわからなかつた。給仕の私は、町会議員や役場の職員に怒鳴られながら書類をもって、あちこちと走り廻っていたのである。

その頃宮津町長は内山廣三氏で、助役は栗田某氏で、収入役は田中市蔵氏、庶務課長は大江一直氏、税務課長は小巻某氏らであったが、選挙の時期は、これらの人々は日の色を変えてばたばたしていた。

私はある宿直の晩、宿直の職員にどっちが当選するのが宮津にはよいのかと訊ねたところ、「津原先生が勝つにきまっている」と話してくれた。つぎにトップな質問だが、「関東震災の時に大杉栄という人が憲兵の甘粕大尉に殺されたが、何故殺されたのですか」と訊ねたら「そんなことを話をしたら憲兵に捕まるぞ」と強く怒られたことを覚えている。

このことがあってから私はますます大杉栄の死に強い関心を抱いた。が大杉栄の暗殺の真相を知

つたのは数年あとのことであつた。

町会選挙と議員

役場の給仕をしていた頃の、町会議員でいま記憶に残っている人々は次の人々である。三上勘兵

衛、矢野藤石衛門、宮城与兵衛、

今林仲蔵、宮村の細見保、皆原の三宅篤、志田友治、杉末の森口、

魚屋町の田崎、本町の三井長右衛門、住吉の前尾庄一、漁師町の宮城某（雄太郎氏の父）、本町の坪倉の諸氏の名前が記憶に残っている。この人々の他にも多くおられたが、いま思い出せない。これらの人々が、激しい選挙の渦中にあつた思い出がある。

今、考えてみると、この時に経験した選挙がその後、私を政治に大きな関心を持つ動機になった一つかのようである。私の記憶では、この選挙のあと、町長の内山廣三氏は辞職して、そのあとに、福田

の勉強に京都に出たが、上京してはじめて、純粹絵画ではなく、応用美術で、それは染織工芸の仕事であった。私はあきらめて染織工芸を勉強する肚を決め、その仕事に熱中したものである。

第一回普選の時

年があけた一九二八年（昭三）

二月、普選第一回の総選挙があり、日本共産党が弾圧（三・一五）をうけ、中国の張作霖が鉄道爆破で殺されたりして、つぎつきの大事件が起き、私は、事件の号外をむさぼり読んだものである。

選挙の時は、年令を偽つて、壬生車庫北にある第一朱雀小学校講堂での河上肇先生の演説を聞きにいった。また、三条青年会館で安部磯雄の演説会を聞きにいったこともあった。三条青年会館の演説会の入口には警官が入場者を一人

一人調査していたが、年令を偽つて入場したことをおぼえている。私は、この年（一七才）に、たしか河原町蛸薬師上ったところの大好きな書店（それはたしか現在の駿々堂がある場所。あの頃は、夜になると河原町通りの西側に夜店が沢山出ていた）の前の古本屋で

上洛—染織工芸の勉強

私は、一六才の年（　　れに絵画

『第一原理』を買つたら、その本の中に赤い表紙の「共産党宣言」幸徳秋水・堺利彦訳がはさんでいた。古本屋のおやぢは、「良い本があつたでしょう」と私に言葉をかけてくれたが、私は黙つて新聞につぶんでもらつて帰つた。

私にとってはこれが生まれてはじめて左翼文献を手にした瞬間であつた。

『共産党宣言』を読む

私は、毎晩仕事が終ると、「共产党宣言」をむさぼるようにして何回も読んだものである。今迄みたことも、聞いたこともない世界のことが頭のなかへとびこんできて、私は興奮したものである。

この「共产党宣言」を読んだことが、私にとっては人生の大きな転換であり、個人的には変革であった。その後、私は意識的に左翼の本を読みだしたものである。また、左翼の演説会、講演会はできるかぎり出掛けた。また左翼の演劇(新協劇団等)が岡崎公会堂でやられるとかならず観にいったものである。いまでも強く印象にのこっている演劇は「吼る支那」である。またプロ美術もできる限り

みつた。そしてその頃、京都でプロ美術運動をしておられた、東山一条角の奥村氏の家を何回か訪ね、奥村氏の話を聞いていろいろと新しい美術について啓発されたことがある。

徴兵検査で宮津に帰つた時、はじめて自分が肺を患つていることがわかり、私はそれから療養生活を六年間つづけることになった。

(終り)

新の古い伝承

(一九九三年刊)

次の手紙を添えて、吉川信彦氏より本書をいただきました。

「父正信が死去致しますまで『燎原』を愛読しておりました。が、平成四年十一月二十一日に死去致しました。(中略)この本は父正信が農学部を出ましてから、民主化運動に関心を持ち、農民運動

や大正、昭和戦前期の南山城の「農民運動について」の論考も収められている。

吉川正信氏は一九

とも少なからず無関心でなかつた一生についてまとめました」。

故品角一郎氏の遺稿「農民運動散歩記」は、九二年九月二〇日発行の八四号より、本九四号まで一〇回にわたって連載しました。四〇〇字詰原稿用紙一五〇枚、六万字に及ぶ長いものでした。この「農民運動散歩記」の意義については、立命館大学教授大庭輝雄氏の紹介文章で尽くされています。九二年一月の八五号記載の分より、編集部で「小見出し」をつけました。

『農民運動旧友会の集い』ご案内

本誌会員の羽原正一氏(大阪在住、一九〇二年生れ、九二才。一九八六年に「農民解放の先駆者たち―回想農民闘争史」(B6・360ページ)を京都文理閣より出版された)より、つきの案内をいただきました。

「私達の農民運動旧友会は昭和三十六年第一回開催以来、昭和六十四年第十回の会合を終えた後、そのままなつていました」。「会員の中から、今年はぜひ集まろう、との希望がよせられ、早速ご案内した次第で

● 日 時
94年6月26日(日)午後1時

● 場 所
大阪市福島区吉野二丁目三ノ四
和食「さと」野田店
(06・443・2643)



泉 隆・病床日記(2)

自一九六八年七月一五日至九月二十五日

戦前、戦後、京都で「農民運動の父」といわれた泉隆さんは、今から二六年前肺癌で京都安井病院に入院、約半年間の闘病生活を送りましたが、遂にその年の十二月二十二日京大病院で死去されました。享年六十六才でした。

この間泉さんは死の床にありながら二つの文章を書きあげました。その一つが「会心の闘争」といって自伝的闘争記録で、先年「山宣研究」誌に既に発表されました。他の一つがこの「病床日記」です。

今回御家族の御了解を得て発表することにしました。最期の最期まで闘争心を忘れなかつた泉さんの生きざまに、私達は深く感動をおぼえるものです。紙面の都合で数回にわけて掲載します。(一九九四・四・二〇)

○一九六八年七月二十四日

今日は月末の伝票を書く。午後家内及息子夫婦訪ねる。章子は何んとも言えない可愛い。しかししばらく見なかつた為私の顔を見たら泣く。寂しい感がした。息子夫婦新しい家の契約に行くといふ。だまされない様注意する。室内は残つた。色々片付等をなす。

向いの病室に入った七〇才位の男、何か胃病で入っているとか見舞客十数人、さわがしく寝られず。その上蒸し暑く往生する。

○二十五日

隣の病室の見舞人多く夜を徹して廊下に居り、さわがしくて眠れず。今日も引きつづき居る。今日は慣れた。

家の伝票を書く。病気はくつ苦痛かにして居るので注

○二六日 金曜 晴

一二三日来つづいた向ひの病室の騒々しさは、今朝五時半漸く終点に来た。即ち本人は息を引き取つたのである。家族、殊に娘等が「オトウーサン」々々と必死に呼ぶが返事がないので、何で返事をせぬのか少しでも隣で聞いてくれと泣き叫ぶ声、隣で聞いている私も堪えられない悲しみを(マ)えた。

多分この父親は子の為と必死で働き、遂に老いて病を得てこの為に病になつたのだと想像し、貴き伝統を子孫に残したのに違いないと思う。

家の伝票は全部かいだが医師の注意があつた。まとめをする気になれなかつた。朝八時半家内が見舞に来て家の事、町内の事を話した。

○二七日 (土) 雨

世間ではタイ風が来るのはないかと心配している様である。

小説「おゆき」を読み、貧民階級の心理生活を具体的にとらえている。午前家に電話し皆元気に働いて居るやうである。午後山中君訪れ、色々と山宣の葬儀の状況を話し、奥村甚之助が当時府会議員だったが、何うも警察に買収され葬儀に付、彼の訪問は今の私の生活中、取り引をした様子などを話す。実に楽しい時間を与えてくれる。誠に有難い。

○二八日 雨

颶風の影響で一日中霖雨。風もあって病室もかなり涼しい。家に電話したら、娘と四郎君は伝票配りをしているのですまい気になる。

今日は嵐山中島で日中不再戦の碑の除幕式があるので、当病院からも参加したと思う。夕方

意を受く。山中氏午前におとづれ三田村の話が出た。小山氏も訪れ日ソ青年友好祭のソレンの態度を心よからず思う。

家に電話したところ、君代よ

り新居を買う話を中止せりと言う。結構と思う。

と。早く彼も第一線ではないが、よく同志のためにつくしてくれたので、平素より感謝している人物である。

高田氏が訪ね除幕式に参加してきたと話されていた。一日中「おゆきさん」の小説を読む。

○三〇日 (月) 雨

松本清張の昭和史発掘を読む。石田検事の死を賭しての検察精神と正義観を見る。軍部、政界の腐敗へメスを振る作家に痛快を覚ゆ。

午後、太秦のお父さんが訪ねられ、圭子がオムツが取れた報告を聞きうれしく思う。

又、重沢先生も見舞にこられ、河田君の当選を祝福してくれ本当に嬉しく思う。

○八月三日 (水) 雨

阿片戦争を読む。清国支配層の硬直した政策は、独裁専制にて必然的に亡び行くものの一つの型を示している。又英國もその他の国家も実に利益の為には、どんな相手の人民を不幸にしても、意の介せない事もはっきり判る。今アメリカ帝国主義や日本独占資本は、自分の資本のもうけのためには、何んと人間の苦労を無視して行く態度をとるのと似ている。そこで我々人民、このことを知らず此等支

『に何かよいことを期待する、これをやめねばならない。

午後浅田さんの奥さんが見舞にこられた。丹後・丹波に行く用事が多いとの話だった。これからあちらの方も変って行くだろう。

○七・三一 水 曇

ベッドにいると日々、日の順を忘れて、今、31日の分を書く。

午前、君代が来た。顔を見たくなつたら来るということだ。

四郎君はやさしく君代に協力してくれ、お母さんとも仲良くしててくれるから、心配せず養生してくれという事だ。良い子を持つたと思う。「阿片戦争」读懂だ。

○七月二日 金 曇

原爆の手記をアカハタで読む。

惨忍な戦争を起した日本の支配層をにくむ。あまい考をもつてはならない。日本の支配層が以下の家来として残(惨)忍の限りをつくしている米帝を、何としても打倒せねばならない。このためもっと勉強をせねばならないと思う。

午後、森晃一さ 奥さんと娘さんが見舞に来てくれ感謝に堪えない。

○八月三日 晴 土曜日

朝早くから家内が訪れる。色々世話をしてくれ十時頃帰える。「阿片戦争」を読む。民族の誇り、これを国家よりも優先して保持すべきを考えた。中国の偉大な指導者に頭が下がる。

午後診療で胸の曇りは少しずつ去っていくやうだといわれて嬉しく思う。

○四日 晴 日曜

阿片戦争を読む。正午頃、渡辺伊之助さんと千本の森はるみさん(森栄吉氏のよめ)病気見舞に来る。二人とも雑談で、子供がおらない方が、孫も居ない方が気楽で一番よいと言っていた。それぞれの立場で年老えればそんな観念になるのだろう。乃んちゃん家族と一緒に見舞いにきた。乃んちゃんが見舞いに来たのは何より嬉しく思ふ。何

○二八日 晴 雨

阿片戦争で英國が漢奸部隊を玉(弾)よけにした。また後から督戦したりしていたことを読んで恐ろしく思う。

間に役立つか、邪魔ものにならずにすむか色々考えていた。

○八月五日 晴

朝、家に電話する。今日は支払日、君代は三〇万円銀行より払出したと言ふ。色々家族に苦労をかけて大変だと思う。

近所のサワ美容院の奥さん見舞に来られた。近所の心づくし

を有難く思ふ。今日電話をかけたとき、久しぶりで圭子の「オディチャーン」というハッキリした声をきいて嬉しかった。早く退院して圭子を守りしたりお話ししたりしたいと思う。

阿片戦争で英國が漢奸部隊を玉(弾)よけにした。また後から督戦したりしていたことを読んで恐ろしく思う。

午前、西口克巳の祇園祭一部

を読む。午後、太秦のお母さんが訪ねられた。午後から家内が着替等を持って来て色々世話して行く。長く療養してもよくなつたら、八十才までお父さんは生きられると元気に話していた。何うも病状は悪い。療養を要するらしい。

○八月七日 水 晴

朝から西口君の祇園祭を読む。働く人が歴史を作ることを、現実的に描きだした名作といえよう。

正午前、下サガの山内君が見舞に来た。相変わらず元気なので嬉しく思う。

午後四階の個室と変わらないかと看護婦がいったので、この室を見に行つたが変わらない事にした。住めば都で今更新しい室に移つて氣を使うことも面倒と思つた。

○八月八日 木 晴

朝、原水爆禁止世界大会の閉会のメッセージを読んだ。世界の良識がこんなに熱烈に支持する世界大会の目的は、必ずや実現さるものと信んずると共に、アメリカと日本の独占資本のし

ぶとさに、益々闘志を高めなければと思ふ。それから今年半年前に我が子を原爆症でなくした名越操さんの言葉を読み涙が出た。必ず愛児の死をむだにしないように努力せねばならぬ。家に電話をかけたり、もう地蔵盆の用意で忙しくして居るようだった。夕方山中君と山宣の事につき色々と話す。

○八月九日 金 雨

山本宣治（田村敬男）を読む。田村敬男君の正確な編集に敬意を表するが、山宣労農葬の七条から三条青年会館までの自動車賃のタダは、官憲はデモ行進を恐れ奥甚との妥協と思つてゐるが、その正否はわからぬ。

○八月十日 晴

ローラン、井上靖の本を読む。よく中国文献を調べたものと思う。晝頃、木崎、庄田両同志がS（支部）を代表して見舞に来た。花籠と金千円を受取り、そして今□では前衛増刊号をテキストとして学習に取り組んでいるとの事。如何なる場合

如何なる人々でも、党の政

策を納得し得るよう勉強せねばならない。私も十一日から二十一日まで安保、二十一日から三十一まで党の理念につき学習すると約束した。

日本の独立と平和の為に、全身靈をつくして奮起せねばならないと思ふ。

○九月十一日 晴

今日は日曜、正午過ぎ四郎君君代家内が章子を連れて見舞に来た。章子ももう歩くやうになつたのみならず見違える程凜々しくなつたのに目を見張るばかり。圭子とは性格は違つて発育して行くやうだ。

家内は残つてコマゴマした事を世話して、又地蔵盆の用意で色々と町内会の事で忙しいやうだ。私がいなくとも何とかやって行くだろう。（以下次号）

会や本誌については、編集部担当の奥田修三（宇治市広野町寺山17-257、○七七四・四三・一三四七）、湯浅貞夫（京都府船井郡日吉町保野田、○七七一七・二・〇一四六）の両名のいずれかにご連絡下さい。

94 93号につづいて、この号では、3・3・11～3・15に受領させていただいた方々のお名前を掲載させていただきます。厚く御礼を申し上げます。

「燎原」事務局

領収書にかえて

酒谷 義郎	東山区	大前 哲彦	枚方市	小山 真一	北区
関谷 美奈子	左京区	五辻 英一郎	中京区	西城 保子	宇治市
長島 三郎	伏見区	春日 正一	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒谷 義郎	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	関谷 美奈子	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	五辻 英一郎	中京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	春日 正一	横浜市鶴見区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	岩崎 彰之助	左京区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	大前 哲彦	東山区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	酒井 一	大和高田市
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	岩崎 彰之助	左京区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	大前 哲彦	東山区
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	酒井 一	大和高田市
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	岩崎 彰之助	左京区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	大前 哲彦	東山区
長島 三郎	伏見区	伏見区	横浜市鶴見区	酒井 一	大和高田市
酒井 一	大和高田市	天野 和夫	右京区	岩崎 彰之助	左京区
桑原 英武	茨木市	古森 敏夫	宮津市	大前 哲彦	東山区
泉 君代	右京区	小田 切明徳	伏見区	酒井 一	大和高田市
長島					